主日礼拝説教 「希望の光は夜の明ける前に」

日本基督教団石神井教会　2018年9月23日

【旧約聖書日課】創世記　32章23～33節

23その夜、ヤコブは起きて、二人の妻と二人の側女、それに十一人の子供を連れてヤボ
クの渡しを渡った。24皆を導いて川を渡らせ、持ち物も渡してしまうと、25ヤコブは独り
後に残った。そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。26ところが、その人はヤ
コブに勝てないとみて、ヤコブの腿の関節を打ったので、格闘をしているうちに腿の関節
がはずれた。27「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」とその人は言ったが、ヤコ
ブは答えた。「いいえ、祝福してくださるまでは離しません。」28「お前の名は何というの
か」とその人が尋ね、「ヤコブです」と答えると、29その人は言った。「お前の名はもう
ヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」
30「どうか、あなたのお名前を教えてください」とヤコブが尋ねると、「どうして、わた
しの名を尋ねるのか」と言って、ヤコブをその場で祝福した。31ヤコブは、「わたしは顔
と顔とを合わせて神を見たのに、なお生きている」と言って、その場所をペヌエル（神の
顔）と名付けた。

32ヤコブがペヌエルを過ぎたとき、太陽は彼の上に昇った。ヤコブは腿を痛めて足を引
きずっていた。33こういうわけで、イスラエルの人々は今でも腿の関節の上にある腰の筋
を食べない。かの人がヤコブの腿の関節、つまり腰の筋のところを打ったからである。

【使徒書日課】コロサイの信徒への手紙　1章21～29節

21あなたがたは、以前は神から離れ、悪い行いによって心の中で神に敵対していました。
22しかし今や、神は御子の肉の体において、その死によってあなたがたと和解し、御自身
の前に聖なる者、きずのない者、とがめるところのない者としてくださいました。23ただ、
揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりま
せん。この福音は、世界中至るところの人々に宣べ伝えられており、わたしパウロは、そ
れに仕える者とされました。

24今やわたしは、あなたがたのために苦しむことを喜びとし、キリストの体である教会
のために、キリストの苦しみの欠けたところを身をもって満たしています。25神は御言葉
をあなたがたに余すところなく伝えるという務めをわたしにお与えになり、この務めのた
めに、わたしは教会に仕える者となりました。26世の初めから代々にわたって隠されてい
た、秘められた計画が、今や、神の聖なる者たちに明らかにされたのです。27この秘められ
た計画が異邦人にとってどれほど栄光に満ちたものであるかを、神は彼らに知らせよう
とされました。その計画とは、あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望です。28
このキリストを、わたしたちは宣べ伝えており、すべての人がキリストに結ばれて完全な
者となるように、知恵を尽くしてすべての人を諭し、教えています。29このために、わた
しは労苦しており、わたしの内に力強く働く、キリストの力によって闘っています。

福音

毎月第二、第四火曜日に行っている「聖書を読む会」では、今月から「ローマの信徒への手紙」を読み始めました。すでに初回のイントロダクションを終えましたが、そのときにＭ・ルターが聖書翻訳に際して付した「序文」を紹介しました。ルターは、その冒頭に「この手紙は…もっとも純粋な福音である」と述べて、キリスト者はこれを一字一句暗記するべきであるとまで言っています。そこまで彼が言うのには、彼自身の信仰の経歴があったのです。伝えられるところによると、ルターは、とても内省的な青年で自分の罪の問題に深く思い悩んだのですが、「ローマの信徒への手紙」を通して「福音」を再発見するという経験をし、後の改革に至る確信を得るようになったのです。

もちろん、わたしたちは、ルターが「ローマの信徒への手紙」を偏重したからといって、そればかりを読むわけではありません。他の書簡や福音書、さらには旧約聖書もすべて、わたしたちは、礼拝で朗読を聞きます。可能な限り広く聖書全体から御言葉を聞くべきだとの考えから、聖書日課として定められた三箇所（旧約聖書日課、使徒書日課、福音書日課）の朗読を聞くこともあります。しかしながら、たとえどこが読まれるにしても、わたしたちは、どの聖書の箇所からでも「福音」を聞き取ろうとしているのです。

今日の使徒書日課（コロサイの信徒への手紙）で、パウロは、「**あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりません**」と言います。「福音」は、「良い知らせ」のことです。わたしたちに希望をもたらす「良い知らせ」です。この手紙でも、パウロは、その「福音」を語り、届けようとしているのです。そのために自分は**労苦しており…キリストの力によって闘ってい**ると、パウロは言います。

礼拝においでになられた皆さんは、もちろん、「福音」を聞くために、説教に耳を傾けてくださっているのでしょう。説教がどれほど稚拙だとしても、簡潔に語られずに長々続くとしても、なお皆さんが忍耐して耳を傾けてくださるのは、今日朗読を聞いた聖書の御言葉の中に「良い知らせ」が告げられていることを期待し、また信じてくださっているからだと思います。そうであればこそ、わたしども説教の務めに仕える者も、どうにかして礼拝に集められた皆さんと共に「福音」を分かち合うことができるようにと、苦しみながらも無い知恵を尽くして、説教や礼拝の準備をさせていただいているのです。パウロでさえ「労苦している」というのですから、わたしどもの労苦がどれほどか、想像していただけるのではないでしょうか。

とは言え、「福音」のために「労苦」しているのは、皆さんも同じかもしれません。教会に集められ、福音を聞き、キリストと出会い、キリストの体と一つにされた皆さんもまた、「福音」を証しする器とされている一人ひとりだからです。礼拝でも、その他の営みでも、わたしたちは教会で、「福音」を証しするためにどのように振舞えばよいか、どのように他の人と付き合えばよいか、いつも悩むのです。むしろ、「福音」とは言い難い別ものを、互いにぶつけあったりしているのではないかと、不安になるのです。

和解と祝福

しかしながら、わたしたちは、あまり悲観的になる必要はないと思います。わたしたちが「福音」を上手に証しすることができない者であるのは、当然のことだからです。そもそも、わたしたちの本質が、「福音」とは言い難いものなのではなかったでしょうか。わたしたちの中には「良い」とは言えないものが、深く巣食っているのです。神から離れ、神を畏れぬ悪を行い、他の者を傷つける。しかも、自分では自覚もないままで、実に熱心に、そのような行動に走っている。「自分は、それほど悪くない」と、他の人と比べながら思っている時点で、わたしたちの悪の根深さは、否定しようがないのではないでしょうか。

もちろん、皆さんは、ご自分の罪の問題と向き合ってこそ、礼拝にあずかられていらっしゃるのだと思います。罪の自覚ということでいうならば、わたしたちは、他の人たちよりも明確なものを持っていると言うことができるでしょう。そのような自覚を促すものとして、礼拝の冒頭の「罪の告白」が、どれほど役立っていることかと思います。

そうであればこそ、わたしたちは、罪人として、悪人として、ここに集められているところから出発するわけです。もちろん、互いの罪を断罪することから始める、というのではありません。自分や他の人の罪や悪が断じられるべきものであるにもかかわらず、なお一つに集められ、その罪や悪を断じることによってではなく、赦し合うことによって、新しい関係を始める。それが教会に集められたわたしたちの歩み方なのではないでしょうか。その第一歩を始めてくださったのが、神であり、御子キリストであったのではないでしょうか。

旧約聖書日課（創世記 32 章）は、ヤコブの物語の中の一つの山場です。

ヤコブは、アブラハムの孫、イサクの息子です。双子の兄エサウがいました。その兄エサウと、かつて、父イサクからの祝福を相続する争いをして、故郷を離れたのです。20 年間、母リベカの実家、叔父ラバンの家に身を寄せ、そこで家庭を築き、自立する財産を築いてきたのです。そして今、故郷に帰ろうとしています。兄エサウが両親と共にいる故郷、自分の命与えられた地に帰るときを、ヤコブは迎えたのです。すでに、ヤコブの帰郷の知らせを聞いた兄エサウが、400 人の供を従えて間近まで出迎えに来ていると、告げられていました。明日には、兄エサウと再会するはずです。

ところが、ヤコブは、ここで足踏みをしているのです。ヤコブは、兄エサウとの再会を前にして、策を講じました。自分たちの一行を二手に分けて進ませることにしたのです。さらに、その先頭に、兄エサウのための贈り物を担わせることにしたのです。かつて骨肉の争いを演じた兄が、20 年経ったとはいえ、自分のことを本当に赦してくれているのか、ヤコブには確信がなかったのです。二手に分けた一行の一方が襲われても、残りの一方が逃げ延びられるだろう。その前に、贈り物を見たエサウがどのような反応を示すのか、見極められるだろう。ヤコブは、手を尽くして、兄との再会のための準備をしていたのです。それでも安心できなかったのでしょう、最後に一人、川を渡らずに夜を過ごしたのです。

希望

ここでヤコブの前に、見知らぬ「何者か」が現れました。そして、その「何者か」とヤコブは、格闘するのです。「ヤコブの相撲」と呼ばれる場面です。その格闘は、夜明けまで続きました。ヤコブは、その「何者か」に腿の関節を打たれても、なおその者から離れません。「**もう去らせてくれ**」と言われても、「**いいえ、祝福してくださるまでは離しません**」と訴え、しがみつくのです。そして、ヤコブが最後にその「何者か」の名を尋ねると、その者はヤコブを祝福して去って行きました。

この物語が描くヤコブは、人が本当に帰るべき故郷、神の教会に入っていこうとする者の姿だと、ある説教者（ボンヘッファー）は語っています。ヤコブは、自分で策を講じて、故郷に帰る準備、家族と和解する備えをしようとしました。もちろん、ヤコブは神を知っていました。かつて故郷を離れたときには、一人野宿をして天と地を結ぶ天使らの幻を見、神の祝福の約束を信じたのです。20 年を経て再び故郷に帰ろうというときにも、ヤコブは、神の「行きなさい」と告げる御言葉を信じて、道を決めたのです。しかし、今、まさに故郷の地に入り、相争った兄と再会しようというとき、ヤコブは、自分の策を講じたのです。しかも、自分の一行を二手に分けたときには、「神の二組の陣営」とさえ言って、自分の策を神が承認してくれているとしたのです。それでも安心できず、ヤコブは、自分自身が一番最後に残って、自分を守ろうとしたのです。そのヤコブを、「何者か」が襲った。それは、ヤコブが自分の力で無理やりに故郷の地に進み行こうとするのを、神が押し返されているのだと、その説教者は語るのです。

神は、ヤコブの腿の関節を打ち、どうしても自分の力で兄との和解を実現しようとするヤコブの力を奪い、弱らせられたのです。帰るべき生まれ故郷に、神の家、神の教会に、自力で、自分の考えで入り込むことは、できないのです。自分の力で立とうとする者を、自分の考えで神の家を我が物にしようとする者を、神は、打たれる。そして、ただ、打たれた、弱らせられた者を、祝福し、和解の場へと引き出してくださるのです。

わたしたちも、打たれなければならないのです。けれども、そこから逃げ回っているのが、わたしたちかもしれません。どうにか、自分の考えで策を練り、自分を守り、自力で「良い知らせ」を実現しようとしているのかもしれません。

実のところ、このヤコブのように打たれてくださったのは、主イエスだったのではないでしょうか。ゲッセマネの祈り（福音書日課＝マルコ 14 章）で神と格闘し、打たれてくださった方、十字架で打ち倒されてくださったお方。その主イエスが、神に打たれた方としてわたしたちの前においでくださったのです。わたしたちは、何も考えずにヤコブを迎えたエサウのような顔をして、主イエスをお迎えしたのです。打たれた傷を負われた方と、和解させていただいたのです、主イエスの家、わたしたちの生まれた故郷、神の家で。

わたしたちも、打たれなければなりません。闇の中で打たれるのです。しかし、主は、わたしたちを朝の光のうちに迎えてくださるのです。